

遊びのチカラ
アクティブ・
チャイルド・
プログラム

モデル団体

『東山スポーツ少年団（名古屋市：剣道）』

失敗と再考、試行錯誤の連続… しかし、“継続は力なり”を実証した いくつもの実り



▲手ぬぐいを引いたり緩めたり——
あの手この手で相手を揺さぶる白熱
した戦い



▲遊び1「うーん」
手ぬぐいの端を口でくわえ、反対の両端を手で
持って広げ、その上にボールを載せる。2人組に
なり、そのボールを相手の手ぬぐいの上にパスし
合う遊び。口がふさがっているため「言葉」の
コミュニケーションができない分、目でしっかり相
手を見て、相手が言いたいことを読みとって動く
という訓練にもなる



▲遊び2「おととつ」
寒い冬に、家の中で少人数でも楽しめる遊びを提案。
これは手ぬぐい2本を使った押し相撲。2人組にな
り、手ぬぐいの端をそれぞれの手で持ち、引っ張
ったり緩めたりして相手の体勢を崩す。脚で踏ん張
る力やからだのバランスを立て直す力が養われ、また
駆け引きの楽しさも味わえる



▲すってんころりん、
勝負あり！

名前が刺繍された垂と少し大きめの胴を着け、両手には籠手。2カ月前から防具を装着しての稽古を始めた新入団員たちには、立ち居振る舞いにもすっかり剣士の風格が出てきた。

「防具の重みの分、気分も引き締まるんでしょ。いまは防具を着けるときがもっとも集中しています。まずはきちんと着けることが重要だと指導していますからね。子どもたち、嬉しそうでしょう。やはり剣道をしている実感が湧きますから。いままでは違う姿を見てやってください」

松井満男団長が厳しくも優しい目で稽古場を見渡した。

子どもたちの成長を実感

今日はアクティブ・チャイルド・プログラム（ACP）連載企画、最後の取材訪問。遊びと稽古の間の貴重な時間を利用して、カリスマ遊びの伝道師、岐阜聖徳学園大学の佐藤善人先生を囲み、子どもたちが自らのACP体験を発表し合った。

「クラスの遊び係だったときに『タコ・タイ（ねこねずみ）』をやったんだけど、みんながなかなかルールを聞いてくれないので先生に説明してもらいました。次は大きな声を出して自分で言おうと

思います。あとは友だちと『うーん』をやったときに、楽しかったけれど後ろにひっくり返ってしまつたので、工夫しないといけないと思いました」と話すのは、赤塚琳さん。状況に応じた調整の必要性を、ちゃんと感じとっている。

また、小学3年生の長谷田光喜くんは、学校の20分休憩を利用してこちらも『タコ・タイ』をクラスメイトに紹介。メンバーを「蛸役と、鯛 役に分け、リーダーが『タコ』と言えば蛸が鯛を、『タイ』と言えば鯛が蛸を追いかけるとい遊びだが、東山スポーツ少年団ではこの『タコ・タイ』が一番人気のよう。「学校でもやったら楽しいかなと思って、ルールもカンペキに覚えめました。みんなちゃんとやってくれたから、またやりたくなった」と長谷田くん。

少人数でできる遊び、『うーん』と『おととつ』を家でお父さんとやってみたという谷静里菜さんは、「お父さんにルールをうまく説明できたと思う」と自信が芽生え、次は学校で『タコ・タイ』を友だちに教えてみたいという。

そして小学6年生の坂本亮大くんは、子ども会のクリスマス会で『タコ・タイ』を紹介。プログラムのトップバッターだったが、いきなり最高潮の盛り上がりを見せてさうだ。「しっかりと子どもたちを導いていて、次男なんです



▲坂本くん
「タコ・タイはルールがシンプルだから間違えずにできた」



▲赤塚さん
「遊び係だったのは、二学期」。夏にはすでに学校で試してみたいということになる

ぼくの・わたしの ACP体験



▲長谷田くん
「最初はみんなに教えるのは難しかったけれど、できるようになった」



▲谷さん
「学校でタコ・タイをやるとケンカにならないか心配…だけどやってみたくて思ってます」



▲“カリスマ遊びの伝道師”佐藤先生を囲み、子どもたちが自らのACP体験を発表し合った



▲「先日、試合でも非常にいい動きをしている子どもたちを見て、1年間のACPによる実技稽古の時間縮小の影響はなかったと確信した。むしろACP効果だったのでは」(吉田先生)



▲防具を装着しての稽古が始まって2ヵ月。立ち居振る舞いにもすっかり剣士の風格が

アクティブ・チャイルド・プログラムの内容については、日本体育協会のホームページからご覧になれます。

→<http://www.japan-sports.or.jp/> (トップページ右側「PICK UP」内のバナーをクリックしてください)

■同プログラムについては、コーチング・クリニック誌(ベースボール・マガジン社刊)でも連載中です。

理念を 踏襲しつつ柔軟に アレンジしてこそ

剣道をはじめとする武道や芸事の訓えである、守・破・離は、あらゆる文化の伝達、継承と進化にも通じる方法論・思想に違いない。先生から受けた「遊び」の教えを守り、何度も繰り返して行うなかで自分のものとし、そして道場を離れて、自らが伝える側に立ったときに、なんらかの工夫や調整が必要であることを、また次なる課題を、子どもたちは確実に感じている。

意外な一面を見ました」とお母さんが驚くほどに、見事にリーダーとしての役割を果たした坂本くん。「子ども会の会長になったときに、なんとなく、予感」があったので、ここで吉田先生が教えてくれる遊びのルールとか説明の仕方とかを覚えるようにしていました。「タコ・タイ」を選んだのは道場でみんなが楽しそうだったから。自分で実際に人を動かして、楽しんでもらえて嬉しかったです。お兄さんとともに東山スポーツ少年団に入団して4年、昨年の夏に千葉で行われた第50回全国スポーツ少年大会にも参加した坂本くんは、これからはリーダーとして団を引っ張り、成長していくのだろう。

「身近で見ている指導者にしかできない、子どもたち一人ひとりを、見守る経過管理。ACPだけでなく、ジュニア期のスポーツ指導において、子どもの健全育成のためには、それが指導者に欠かせないスキルではないかと思えます」
設立20周年の節目に、新たな取り組みとしてアクティブ・チャイルド・プログラムを導入し、いくつもの実りを見せた東山スポーツ少年団。春にはまた新しい団員を迎える。

だがその過程は決して、順風満帆だったわけではない。「私自身はACPの理念に当初から共感していました。いざ自分がいる団で実施するとなると、机上で考えるのとはまったく違う。ですから、それはもう失敗と再考、試行錯誤の連続でした」
同団指導者で、リーダー養成ワークショップグループの吉田繁敬先生はそう話す。「遊び」を通じて子どもたちが活動的になれる環境を整えることで、からだを動かすことや人と交わり協調することを自発的・積極的に行うことができる子どもを育み、体力向上につなげようというACP。それは、子どもとかかわる集団・指導者が、子どもたちの特徴や活動状況に応じて、理念を守りつつ柔軟にアレンジしてこそ活きる。それが吉田先生の実感だ。